

7月26日 年間第17主日 マタイ13章44～52節 すべてを捨ててくださった神に従う

先週に続き、天の国についてのたとえ話です。マタイの福音では、「神の国」を「天の国」と表現しています。ユダヤ人キリスト者に向けて書かれたとされるマタイ福音書では、「神の国」というとイスラエルの王国を思い起こさせるからです。ですから、死後の世界のことをいっているわけではありません。イエスの教えはこの世でどのように生きるか、何を大切にするかが中心なのです。

先週は「天の国（神の国）とはどういうものか」というお話でしたが、今日の福音では「神の国を知った人はどうするか」という内容となっています。短い形では畑の宝と真珠のたとえ、長い形では魚の選別の話とその説明が加えられます。

まずは最初の二つのたとえについて考えてみましょう。わたしは今回、十年ぶりに引越しをしたのですが、そうすると出るわ出るわ、高校時代や大学時代に集めていたものが。おそらく値打ちのあるものも含まれていると思いますが、わたしはメルカリやヤフオクが苦手なのでどうしようかなあ、と思っています。本については先日津教会で古本市が開かれたので何冊かは手放しました。みなさんも経験があることでしょうか。そのときはすごく大事にしていたのに、ほかのものに興味が移ると物置の奥にしまい込んでしまっているものがあるのではないのでしょうか。そのように、人生のその時その時に必要なもの、大切にしているものがあるのですが、年齢と時代の移り変わりとともに必要がなくなることがあります。そして最後に残るものが神の国だということです。畑の宝や高価な真珠を見つけた人も、それを手に入れるために、それまで大事にしていたものを売り払っています。そのように、神の国はすべての持ち物を捨ててもいいくらいすばらしいものだということが説かれています。

先月の福音でイエスが「わたしよりも家族を愛する人はわたしにふさわしくない」と言われましたが、これを、「この世の宝と神の国の宝」と置き換えると理解できるかもしれません。イエスの教えの対象は貧しい人や家族に恵まれない人であり、そのような人々はすでに神の国に招かれているからです。

なお、魚の選別のたとえは、そのあとの説明で世の終わりの裁きを表しているとされています。この説明も毒麦のたとえと同様、イエスの教えが伝えられる過程で加わったものとされています。迫害の時代には最後に悪が滅ぼされることが強調されたのでしょうか。

とはいえ、わたしたちはなかなかすべてを捨てて神に従うことは難しいようです。「福音のヒント」には、すべての持ち物を捨てる人の姿は、人類のために最愛のひとり子を与えてくださった父なる神と、命をささげてくださった御子を連想することもできるとありました。わたしたちは、まずそのような犠牲をささげてくださった神に深く感謝するところから始めることが必要なのではないでしょうか。

(柳本神父)